

平岩弓枝
斬
師

たがねし



文藝春秋

專

たがねし

師

弓枝

文藝春秋

鑿
(たがねし)
師

昭和四十六年八月十五日 第一刷

定価 五〇〇円

著者 平 岩 弓 枝

発行者 檜 原 雅 春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一

郵便番号一〇二

印刷 凸版印刷
製本 中島製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1971 Yumie Hiraiwa Printed in Japan

0093-302050-7384

鑿（たがねし）師／目次

鑿師 3

神樂師 45

つんぼ 105

狂言師 167

狂言宗家 213

あとがき 264

装帧
枡折久美子

暫

(たがねし)

師

一

路地に入ると、琴が聞えた。

「ほ、稽古日だったか……」

呟いて、福原茂雄は足音を忍ばせた。

だが、「琴、三絃、地唄御稽古所」と散らし書きにした看板が控え目に打ってある格子を開けてみると、たたきの上に外来らしい履物は一足もなかった。

「お帰りなさいまし。やっぱり一足ちがいでしたわ」

出迎えた妻の篠子が明治生れの女らしく語尾を口の中で消して、手早く外套を受け取った。

「お弟子さんが来てたのじゃなかったのか」

茶の間の切り炬燵に足を入れながら茂雄は開け放したままの奥をのぞくようにした。六畳の真

ん中に琴が一面、ひんやりと置かれていた。

「いえ、あたしが……なんだかちょっと弾いてみたいような気になりましたね」

篠子は横顔を見せた儘、鉄瓶の湯を急須に注いでいた。白い湯気が、篠子の白毛混りのおくれ毛を慄わせた。

「珍しいことだ……」

茶碗を受け取って、茂雄は妻を労わるように微笑した。

明治から大正にかけて民間刀剣鑑定家として知られた高野篁介の書生だった茂雄が、篁介の長女、篠子と結婚して師の鑑定法を継いでから、もう三十年の余にもなる。

刀剣の鑑定以外に定職を持たず、先代からの刀剣愛好家グループの機関誌「かたな」の発行と、たまさか持ち込まれる刀剣鑑定の謝礼だけではどうにもならない家計を、篠子が地唄の教授で補っている。

子がなく、身寄りを持たない夫婦は五十を過ぎてから、無意識の中に互を支え合う習慣を身につけていた。

「珍らしいと言えば、今日は宮崎君に逢ってね。知ってるだろう、刀鍛冶の宮崎利一君」

大ぶりの湯呑の温かさを掌たなこころに包み、茂雄は続けた。

「文化財として国家の指定を受けた程の刀鍛冶でも生活は随分ひどいものらしいな。暮しのため

とは言いながら、鋤だの鍬だのを焼いていると、刀が打ちたくて気が狂いそうになるそうだ。刀が打ちたい、打たせて欲しいと逢っている間中、繰り返していたが……」

「名人といわれる宮崎さんほどの方でも、そんなに刀の注文がないんでしょうか？」

「そりゃあそうだよ。今時、新しい刀を一本打たせるには少くとも三万円はかかるだろう。それだけの金を出して新身あらみを買うなら、江戸のちよいとした刀が入手出来るからね。わたしだってそうするだろう。だからと言って宮崎君の作った刀が悪いというんじゃない。三百年も経ってみれば立派な傑作として残されるだろう。そこそこのかね合いが難しいんだな」

言いさして、ふと茂雄は簾子が片付けている猫板の上の客用茶碗に気がついた。やっぱり、一足ちがい……と言った簾子の一人合点がひよいと思ひ出された。

「誰か、客があったのか」

客茶碗のへりにはうっすらと紅が残っていた。

「あの……ええ」

師 曖昧な簾子の返事に、茂雄は怪訝な顔になった。妻が口籠らねばならぬような女客の見当はまるでつかなかった。

塾 「あの、実は先程、三千代ちゃんが来ましてね。あなたの帰りを待つように申しましたのですけれども……」

おずおずと篠子が言った。

「志村の三千代が……？」

不快の色が茂雄の顔をかすめた。

「又、なんじゃないのか。親父が何か言いつけてよこしたんだろう」

「それが、あなた、志村は胃癌で入院していますんで……」

茂雄は茶をがふりと飲んだ。

「ほう、それでもまだ生きてたのかね」

三年ほど前、新宿駅の構内で偶然、顔を合わせた時の志村逸平の卑屈な態度が目に残り、茂雄は露骨に眉を寄せた。

「あれとは十年も前にきっぱりと縁を切った筈だ。なにを今更、娘なんぞ寄こして……」

志村逸平は茂雄にとって義弟に当る男であった。篠子の妹の芳子が彼との間に三千代を産んでいる。三千代は篠子の唯一人の姪であり、肉親でもあった。

「そりゃあ、あなたは男ですからそんな風に割切ってお出でだけで……三千代になんの罪があるわけじゃなし……今日、あの子が玄関に立つ姿を見たら、つい、不惑で……」

火箸をもてあそびながら鼻をつまらせた。

「いったい、何だって言うんだ」

ひろげた新聞の後から茂雄は暫く間をおいて訊いた。

「申し上げようと思ったんですけど、止めますわ。どうせあなたは嫌な顔をなさるんですから……」

昔のお嬢さん育ちをふっと顔に出して、意固地な言い方をした。それでもふっくらと丸味のあつる篠子の声は夫婦の間にとがった感情を作らなかつた。

「どうせ言わずに済むわけじゃないのだから、早く言った方がいいにきまつてますけど……」

茂雄が新聞を読むポーズを守り続けていると、篠子は一人で妥協の道を開いてきた。

「三千代が刀を持って来たんですの。いいえ父親には内緒で来たらしゅうございます。めばしい刀剣類はとうの昔に志村が持ち出して競輪のお金にしてしまったんだそうですけど、その一本だけは売るのが惜しかったのか、どうしても手放せなかつたのか、とにかく茶箱の中にしまつてあったんですって。今度、志村が入院して、あの子が家の中の物を整理して、みつけたというんですよ」

「それを売りたいというのかい」

「売ればそれに越したことはないんでしょうけどね。散々、ペテンなんぞであぶく銭をもうけたくせに、やっぱり悪銭身につかずっていうのか、戦争からこっちは随分ひどい暮らしをしてたらしいんですよ。三千代がいうには、とにかく刀のことは何も分らないし、志村に聞いてもアルコ

ール中毒で頭がぼけてる所へ持つてきて、胃の手術で体力が衰えてるものだから、さっぱり通じないんで、あなたに見てもらってその上で、どうにかなるものなら処分したいと思ってるらしいんですよ」

茂雄はようやく新聞から顔を放した。

「銘があるのかい」

「さあ、三千代じゃ^{なか}中心を改めることも知らないでしょう。私もあなたがお帰りになるまではなまじ、いじらない方がいいと思って」

「在銘物だと危いぞ。なにしろ偽銘切りの名人の家にあったものじゃあ……」

巻煙草に手を伸ばしながら、茂雄は苦っぽく笑った。

「そうなんですの、私もそれが気になるんですけれど……」

夫婦は複雑な目を見合せた。

十数年前、福原茂雄が志村逸平を義絶し、以後一切、両家の往来を禁じた直接の動機は、逸平が福原茂雄の名を使って大がかりなベテンを働いた事に起因する。

元来、志村逸平という男は、鑢^{やすり}の目切り師であった。鑢にする鉄板に細い鑿で小さな目を一つずつ正確に刻んで行く仕事の熟練工だったから、指先は極めて器用だった。

だが、やがて鑢造りの仕事が機械化されると、当然、目切り師という職は不要となる。失業し

た逸平に近づいたのが刀鍛冶上りの刀剣商の東舎松太郎だった。

彼は逸平の神技に近い鑿うぎの業を利用して、偽銘切りを思いついたのだ。

銘とは、刀剣の中心なご、つまり柄の部分に当る研きりのかかつていない、鑢目のところに、その刀剣を鍛えた刀匠が己れの名を鑿で刻むことで、普通、銘を切ると称している。

古美術として現存している刀剣の中には、刀匠が出来上りに満足せず、自らの名を刻むのを恥としてか、もしくは別の理由によって故意に銘を切らない、俗にいう無銘のものの数が極めて多い。

この無銘物をおよそ誰その作と、刀身の姿、焼き、その他の特徴によって推定するのは鑑定家の領分だが、同じ一本の刀でも来国俊らいくにとしと、無銘ながら「国俊」と判断されるのでは刀剣界の評価から言っても、刀の値にも格段の差が生じる。

まして刀剣商の側から言えば、幕末の或る刀商が近藤勇から虎徹の刀を探してくれと依頼されて、日限までに適当な物が見つからず当時、四谷正宗と呼ばれる山浦清麿の刀を手に入れて、清麿の銘をすり消してその代りに偽銘切りの名人といわれた鍛冶平に、「長曾禰虎徹興里」と偽銘を切らして法外な値で売りつけたという話でも分るように、無銘では買い手のつかない刀でも、著名な刀工の銘、それも本物そっくりの銘さえあれば、ぼろい儲けが出来るわけだ。

従って、もっぱら名の通った刀工の作に酷似した無銘物や田舎鍛冶の三流品の在銘物をすり落

して、偽銘を切り、偽物を作ることは古くからしばしば行われていた。

だが、これには容易ならぬ技術が要った。細鑿一本で、本物の銘の字の癖、形、伸び加減など寸分違わず模写しなければならぬのと、もう一つは模写に付き物の力の弱さをカバーしなければならぬ。

加えて、在銘物を一度、すり消して新しく銘を刻む場合には、中心なかくの錆さびが全部取れてしまっているから、切った偽銘の時代に相応する錆をつけなければ、露ばれてしまう。錆というものは年月を経て自然に現れるのであって一朝一夕に出てくるものではないが、そんな事を言っているのは商売にならないから、人工的に錆を作り出さねばまずい。これが古くから偽銘切り師の秘伝になっていて、中心なかくで塩麴なかくを焼いたり、塩昆布を巻きつけて地下へ置いたり、中には味噌を塗るのが効果が高いと聞いて、たつぷり中心なかくに味噌を塗りつけたのはいいが、中心なかくの部分を上にして刀を立てかけておいたものだから、味噌が流れ出して肝腎の鏝地や刃の部分までが赤錆びて使い物にならなくなったような笑い話めいた逸話さえ伝っている。

とにかく、そんな苦心を重ね、危い橋を渡っても欲にせっつかれて偽銘を切る者が後を絶たなかった。

そして、志村逸平が東舎松太郎の巧みな指導と天性の指先によって、幕末の鍛冶平以来といわれる偽銘切りの業を身につけたのは、昭和七、八年、世間では支那事変の勃発と共に刀剣の価値、

需要が叫ばれ始めた時期であつた。

無論、東舎松太郎の才覚で表向きは刀剣商の看板をかけていたが、自分で偽銘を切った刀は一切、松太郎が捌いて自分の店では手がけなかった。逸平の偽銘切りの発覚がかなり遅れたのも、そうした要心深さの為でもあつた。刀剣愛好家として高野篁介の邸に出入りする中に、次女の芳子に惚れられて強引に夫婦になつたのも、この前後である。

逸平の偽銘切りを最初に発見したのは皮肉な事に高野篁介であつた。持ち主に売り手を尋ね刀剣商をたぐっている中に、東舎松太郎と逸平の線が浮んで来る。

「当代これだけの偽銘切りがいるとは聞いていない」

篁介の疑惑は目切り師の過去を持った志村逸平に向けられた。ひそかに娘の芳子を呼んで詰問すると、かくし切れずに偽銘切りの事実を白状した。謹厳実直な高野篁介である。偽銘切りの行為にはひどく立腹したが、娘婿のことではある。逸平は呼びつけられて諄々と不心得を責められた。

だが、その場ではいくら頭を下げても、逸平は偽銘切りを止めなかった。金が入ってくるといふ以外に、逸平は偽銘を切る鑿の面白さに取りつかれていたのだ。

「よし、あいつがその気なら、わしはわしの鑑定家としての生命を賭けて、逸平の偽銘を見破ってみせる」

老いに鞭うつような宣言通りに、高野篁介は隨所に持ちこまれる逸平の偽銘物を片はしからあばいた。

刀身の中心なかごの上に生半紙を当て、つり鐘墨でこすって銘を写し取る。こうした偽銘の写しと本物の写しとを比較する事によって、篁介は逸平の癖を見出す材料をいくつも発見した。

癖を消そうとする逸平の努力と、癖を発見しようとする篁介との戦いは二年間、鎚を削った。冬、高野篁介は魂を燃やし尽したように死んだ。

「鑑定家と鑿師との勝負だ。刀劍の正邪がそれに賭けられている。頼むぞ、福原……」

師の遺言を福原茂雄は臨終の枕辺で泣きながら聞いた。

しかし、対決は次の春に來た。

関東地区の刀劍商が主催する刀劍即売会の最終日に、最高の値がついた「長曾禰虎徹」二尺五寸一分を、鑑定席にいた福原茂雄が、

「偽銘なり」

と断言したのである。出席者は色めき立った。だが、茂雄は「長曾禰興里入道虎徹」の銘の中、虎の字を彪はむとらのように切った跳虎時代と庸の字に切った角虎時代とが、万治以後の虎徹の銘にあることを指摘し、

「この偽銘は跳虎時代から角虎時代に移る時期、つまり鑑定法の穴をねらったものと思われます」